

海原会会長 徳光和夫（昭和 34 年卒）

初めての海原会総会に寄せて

なまじ伝え手職人がゆえに何を語ればよいのか逡巡した。海原会総会、会長としての挨拶である。まずは今年も全国屈指の進学校として勇名をはせるべく指導した教師各位、学校関係者、生徒諸君の努力に OB として敬意を払うところからスタートした。母校のブランド価値が高くなればなるほど OB 会長として権力を得たような錯覚だけは絶対に避けなければならない。というのもこの情報化時代、ネットなどで私が海城の OB 会長に就いたことを知っている見知らぬ他人（ひと）から、たとえば「ウチの従姉のご主人が徳光さんのことを知っているのでわが子の海城中学入試に際して相談に乗ってもらえないか」等々これまではなかった話がもちあがる（勿論丁重にお断りはしている）ことがあるので、改めてこの海原会会長という任は心してかからねばと自己に言い聞かせている。そこで会長役を仰せつかってから母校の現状を観てみるといわゆる偏差値重視教育ではないことに気づく。ともすると有名進学校は有名大学合格のための通過点になりがちだが、わが海城学園は中高通しての 6 年間、あるいは 3 年間をこの学び舎で何を為し得たか、思考を大切にする教育が施されていると思った。私は中高興時代に培ってもらいたいのはやや尖ったくらいの反骨精神、換言すれば大人社会への批判力と捉えているので現役学生諸君と話したときにこのことを感じることができ、心強さを覚えた。この時期にイエスマンになってしまうとあるいは身に着けてしまうと、本物の愛校心（愛国心）は宿らない例を放送現場で幾度となく見てきた。一方で、総会の最後に OB へ歓迎演奏をしてくれた吹奏楽部のレベルの高さ、レパトリーの広さに生徒たちの部活での充実度を覚えた。彼らはこの学園の中での思い出を確かに身につけ巣立ってゆくと確信した。私事で恐縮だが、先般 AKB48（10 代を中心とした娘タレント集団）の総選挙の司会を担当した。これは彼女たちの真のファンが決める今年度の人気ランキングのことだが、彼女たちは自分をより磨くためにより自らに厳しく練習を積み、その中でライバルである仲間と真の友情を見出してゆく。平成のアイドルである娘たちが昭和のアイドルと明らかに異なるのは選挙で当選の喜び、ランクが去年より下がった悔しさを自分の言葉で熱く語り、涙することである。選ばれた娘も落選した娘も AKB という枠の中で驚くほどの輝きを放っていたが同じ光を母校の後輩たちに感じ取ったのは私だけではない。そしてその輝きをサポートしているのが父母たちであることも知った。わが子を海城に入れた誇りが御父母の結束になり、野球場でもコンサートでも黒子に徹している姿を何度も拝見した。この御父母も子息の卒業とともに結び目が解かれてしまうことを察すると残念でならない。もし海原会としてサポートが可能であるならば、海原父母会として柔軟性のある組織を作ったらいかがなものか。但し海原会本体もあまり緻密な組織づくりをしてしまうと窮屈になってしまう。本会はあくまでも先輩・後輩という心地よい響きを持つ一方で、海城の OB として平等の憩いの場でなければならぬと思う。今昔を問わずあの甘いガムの香りに包まれながら老いも若きも“友と語らん”そんな場としてゆきたいと思っています。